



<特集論文：人間にとって地域社会とは> 「地域の質」の向上のための生態学的福祉哲学：いのちを大切にす地域構造を目指して

著者	加藤 博史
雑誌名	人間福祉学研究
巻	12
号	1
ページ	9-23
発行年	2019-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029560

特集論文：人間にとって地域社会とは

「地域の質」の向上のための生態学的福祉哲学

——いのちを大切にできる地域構造を目指して——

加藤 博史

龍谷大学名誉教授

● 要約 ●

本稿では地域福祉の質を問い、エコロジカル・コミュニティの在り方について考察した。そして以下のことについて論じた。①「学校、会社」システム、および「SNS」システムによって地域が変容している。これに適応する主体形成ではなく、これをエコロジカルな方向に変革する主体形成が求められる。②ジャーメインのライフ・モデルを検討した。富と権力の配分不全による「社会的汚染」、大気・水質などの「科学技術的汚染」、差別などの「迫害」を克服するために、環境との互恵的な交互作用と社会的権利保障が重要である。③つながりを深めるには、「共受苦」、「弱い関係」、「時間性」が重要である。④死や悲苦に共感し対話する時間を共に過ごすことで、中心体験が共展開（co-evolution of central experience）され、地域が育つ。⑤いのちを大切にできる風土だけが個人の尊厳を育む。そこからしか真の主権性は培われない。

● Key words : 地域の質, エコロジカル・パースペクティブ, ライフ・モデル, ジャーメイン, ソーシャルワーク

人間福祉学研究, 12 (1) : 9-23, 2019

1. はじめに

地域福祉の方向性やビジョンが自明のように語られている。だが、改めて、「地域福祉は、どのような地域づくりを目指すのか」と問われると、筆者は応答に窮してしまう。常々筆者は、地域の福祉度（Quality Of Community）の可視化・数値化の必要性を感じており、試行錯誤を挑んでいきたいと考えている（加藤，2016：33）。

たとえば、筆者は、地域の福祉度測定指標を、機能レベルでは、①自由&開放的地域、②安全&安心な地域、③快適&利便な地域、④交流&協働の盛んな地域、として挙げている。さらに、構造レベルでは、①個人の尊厳を大切にできる地域、②多様性&インクルーシブな地域、③自治&主権が

活きる地域、④サステナブル&エコロジカルな地域、を仮説的に設定している。これらは相互に関連しているが、なかでも住民のエンパワメント（自治）とエコロジカル・コミュニティの実現は、地域福祉の本質を考えるうえで重要である。本論ではこれを基軸に地域福祉の目指す方向性を明らかにしていきたい。

2. 地域福祉の課題把握の思考枠組みと克服の方向性

地域福祉を考えるうえで、児童虐待の蔓延は象徴的である。児童虐待を減らし防ぐことができる地域は、地域福祉が目指す地域といえる。

わが子を虐待してしまった親に対するケア・プ

ログラムが、森田ゆり等によって取り組まれている(森田, 2018)。2018年8月18日に開催された、その第3回全国フォーラムで、二人の虐待した当事者である母親がメッセージを発表した。一人は、夫が朝早くから夜遅くまで働く中で、誰にも相談できず、子どもと二人きりになり虐待に陥ったことを語った。もう一人は、夫が多額の借金を背負い、家出をしてしまい、子どもと二人取り残された中で、虐待に追い込まれたことを語った。このように、虐待の背景にあるのは、孤立、長時間労働、過労、借金、低収入、生活基盤の破壊など、社会構造的課題である。森田が主宰する「MY TREE ペアレンツ・プログラム」は、セルフヘルプ・グループの一つであり、多声的対話(multi-voice dialogical meeting)による社会的つながり形成(social networking)(セイックラー、アーンキル, 2016)を通してのグループ・エンパワメントだと考えられる。では今日の社会構造を、どう認識したらよいのであろうか。「学校」化と「会社」化という社会の状況から見てみよう。

イヴァン・イリイチが指摘する通り、「学校」システムが人類史上に現れ普遍化したのは、さほど古いことではない。日本では、一部の武士階級が服従思想を修める「藩校」や、実利的な読み書き算盤を習得する「寺子屋」は18世紀に普及する。しかし、人々を国民として教化し、系統的に生産力として訓練・分類・管理する、国家政策としての「学校」が出現するのは明治維新後であり、世界的に見ても産業革命以降である。

「学校」システムは「会社」システムと生産力管理という点で連動している。資本主義の成熟は、農林漁業や職人仕事をマイナーなものにし、人々を「総勤め人化」する。日本では1960年代前半まで、前者が後者を包囲していたが(勤め人が珍しかった)、1968年前後を分水嶺に均衡が急速に崩れ、前者が衰退していく。そしてこの「会社」と「学校」という二つのシステムが緊密連携し、「生活」を生産性向上の手段にしていく。

ありていに言えば、良い子を育てるために幼稚

園があり、良い大学に入るために、小中高があり、大学は良い会社への就活の場であり、生産性向上に自己統御できる人材の陶冶の場となり、一流企業の安定ポストと収入をもたらす、という構造である。むろん大量の敗者や競争から降りた人々も生み出していく。

これは実はマイルドな優生思想である。「学校・会社」構造の肥大は、親戚・近隣・友人・地域社会・協会を生産性競争の実現手段にしていく。さらに、家庭づくりも業績生産効率の低下を招く場合、忌避の対象にされる。つまり、社会の競争圧力が強まり、人々は受験と勤務に忙殺され、1980年前後から小此木啓吾の指摘に象徴される《家庭の解体》が始まる。共同体(共同の関係性)の緩衝機能(resilience)の働かない中での、「学校・会社」での激しい競争は、校内いじめ、不登校、過労、うつ病、わが子虐待を生んでいく。この現象は、ある意味で過酷な状況の中での《正常》な反応であり、ストレス処理能力(stress coping capacity)の文脈だけで認識してはならないものであろう。

一方、2000年ごろから普及した携帯パソコンによるネットワーク社会と、競争から降りた社会階層「下流社会」の出現は、「学校・会社」システムの中で抑圧されてきた人の生きやすい《息場所》になっていく。グローバルにつながったSNS社会は、一見多声的で開かれたパブリックな場所にも思われるが、対面的でないためにホーリスティックなコミュニケーションが取れず、その匿名性ゆえ、無責任であり、衝動的攻撃の制御が極端に弱くなる。SNS社会の進展は、形を変えた「総引きこもり化社会」といえる。したがって、すべての人が《社会という娯楽番組の視聴者》であり、快感性と新奇性の需要を際限なく引き出され、人々の権力批判の閾値は高くなる。

人類史上、ほんの半世紀間の社会構造変化は、人類にとって自然(nature)ではない。人間の内なる自然は、食べる、排泄する、病む、老いる、死ぬ、恋する、心を通わせ合う、群れる、遊ぶ、

性欲を満たす、子を産み育てる、破壊衝動を持つことなどであろう。ネイチャーとカルチャーの境界は截然としたものではなからうが、この半世紀間の変化は1万年単位の慣習からは異常なものであり、人間のネイチャーに大きな負荷を与えて当然のものである。必要なのは、この構造に適応する主体形成ではなく、この構造を批判的に変革する主体形成である。

ソーシャルワークのグローバル定義 (IFSW, IASSW) が、2014年10月に改訂されたが、その核心部分 (Social Work engages people and structures to address life challenges and enhance wellbeing.) の定訳は、「ソーシャルワークは、生活課題に取り組み、ウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける」となっている。筆者は、これを、「ソーシャルワークは、人生の諸課題に積極的に立ち向かい、人生を意味あるものにしていくために、人々および諸構造に関与する」と訳す方が良いと考えている。

クライアントの人生上の挑戦をアドレスすることがソーシャルワークの目的であり、生活課題の解決が目的ではない。「学校・会社」システム、「SNS」システムは閉鎖的・同質的であるがゆえに暴力的構造を持っている。ここから自立して人間のネイチャーを守ることは、私たちの大きな《人生上の挑戦》ではなからうか。以下、地域を開放的多様性のあるものに変革するソーシャルワークを、ライフ・モデルに求めて考察する。

3. ジャーメインのライフ・モデルの検討

3.1. ライフ・モデルの背景

キャレル・ジャーメイン (C. B. Germain) によって1973年、ソーシャルワークのライフ・モデルが提起された。ジャーメインは次のように述べている。「ライフ・モデルは問題を、病理的状态の反映としてではなく、生態系の要素間の相互作用の結果として定義する。その生態系には、人々、事物、場、機構、観念、情報、価値を含

む」(Germain, 1973: 327)。ジャーメインの提起したモデルは、本来、互惠的關係 (reciprocal relationships) にある環境と人であるが、人が環境に交互作用的 (transactive) に関わることができなくなり、環境が人の権利とニーズに応答性 (responsiveness) を発揮できなくなっているために、互惠的關係が機能低下しているところに、ソーシャルワークの課題を設定するものである。

ジャーメイン (1916年10月23日-1995年8月3日) は、サンフランシスコに生まれた。カリフォルニア大学バークレー校で経済学学士を取って卒業し、ベイエリアで働いていた。1941年、ウィリアム・ジャーメインと結婚し、双子の娘を育てた後、1961年にコロンビア大学大学院でMSを取得、メリーランド大学の大学院でソーシャルワークの教鞭をとり、のちにコネチカット大学に移って准教授、教授、副学長を歴任する。ジャーメインのソーシャルワーク研究は40歳を過ぎてからであった。1971年にコロンビア大学でDSWを取得し、1972年から79年まで、コロンビア大学で教員生活を送り、この間、同僚のアレックス・ギッターマン (A. Gittermam) と共同研究を行っていく (Sophia Smith Collection)。ギッターマンは、1938年生まれであるから、ジャーメインの22歳年少である。彼は1972年にコロンビア大学で教育学博士号を取得している。ジャーメインは、1979年から1987年までコネチカット州立大学大学院に戻り教鞭をとっている。

ジャーメインは、1973年の論文で、人間と環境との間の交互作用の質を高め、福祉を支える環境を向上させるエコロジカル・ソーシャルワークを提起している。ジャーメインは、環境において効果を得ることや、環境と共に成長誘導経験を追求することに向けられる生得的奮発力 (innate push) を「コンピテンス (competence)」という用語で概念化し、これをロバート・ホワイト (White, 1959) から援用したとし (Germain, 1973: 326)、「場の理論 (field system)」は、クルト・レヴィン (Lewin, 1964) から、「生活モデル (life model)」は、

バーナード・バンドラー (Bandler, 1963) から援用したことを記している (Germain, 1973 : 328). 同論文でジャーメインは、ライフ・モデルが E. H. エリクソンの考えを基礎にしていることに触れている。それは、「物理的, 社会的, 文化的, 制度的環境との相互作用により, 各発達段階に特徴的な人生課題を解決していくことによって, 自我が発達する」という考えと、「次々と世代にわたり環境を創造することによって, 多世代の歯車がかみ合い, 相互関係性と適応的調和が達成される」という考えである (Germain, 1973 : 326).

ジャーメインは、1980年のアン・ハルトマン (A. Hartman) との共著『ソーシャルワーク実践史における人と思想』においても、エリクソンを引用し、「エリクソンは、専門職の過去と現在の連続性が、専門職的アイデンティティの一部になるなら、過去と現在の両方のモデルを用いて、選択的否認と融合による同一化をする必要があると指摘している」(Germain, 1980 : 323) ことに言及している。

ジャーメインは1973年、「環境の社会的汚染 (social pollution)」という概念を提出する。それは、「住宅, 教育, 健康ケアのシステムの機能不全」および「富と権力の配分不全によって起きる」ものである。この不全は、ボランティアや専門職関係者, 地域独自の援助者, セルフヘルプ・グループなどの活用および、意思決定とコンピテンス向上に主眼を置いた社会福祉機関の政策, 計画, サービス企画を活用することによって、軽減される (Germain, 1973 : 328) としている。

彼女は、社会的汚染として、貧困, 失業などに加えて、「核軍備競争 (the nuclear arms race)」を挙げている。また、「科学技術的汚染 (technological pollution)」という用語で、大気・水質・土壌・食糧の汚染の問題を指摘し、かつ、「迫害 (oppression)」という用語で、支配的集団による年齢・性表現・人種・階級・心身の障害に関する差別, 虐待の問題を取り上げている (Germain, 1978 : 492).

ジャーメインは、ライフ・モデルで重要な要素

として時間性を挙げ、時間性を「ベース」, 「持続」, 「リズム」で捉える。そして、「時間は、潜在可能性と限界, 創造性と死, 変化と永遠を語る無言の言葉である。実践での生態学的視野において、諸システムのネットワークにおける各システムは、独自の時間の織物性と独自の周期性をもっている。個人, 家庭, 機構, 言語, 文化, 社会は人々の価値とライフスタイルに影響を与える “時間に関する個性的な志向性” をもっている」(Germain, 1976 : 419-420) と述べている。生物的時間には、昼夜や季節, 宇宙のリズムも含まれる。心理的時間には、待機やイベントの連続など「持続」性, 想起や期待が挙げられている。文化的時間には「現在」を強調する文化, 「過去」を強調する文化の例示が挙げられている。社会的時間には、日課や月次行事の周期性, 休暇や労働周期のような時間の質, 同期性のような時間の共有, 早い時間, ゆったりした時間, 多様性のある時間, 窮屈な時間, きつい時間, 放縦な時間, ぼんやりした時間などの概念で時間性を検討している (Germain, 1976 : 422-425)。ジャーメインによれば、未来は常に多義的で不確かである。そして、「人間の潜在可能性を解き放つことと、滋養豊かな環境づくりを促進していくことの二つの道の追求において、私たちはただ、創造的適応と成長のための人間の可能性だけを確信することができる」(Germain, 1976 : 426) と述べている。

次に、「空間」性に関してもライフ・モデルにとって重要な概念となる。ジャーメインは、「距離」, 「方向性」, 「密度」, 「垂直・水平」, 「左右・上下の指向性」, 「互惠性の欠如」(Germain, 1978 : 516) などの概念を用いて、空間性を論じている。「人々が物理的設定をすることは、単なる空間 (space) ではなく、場所 (place) を作るということである。その場所とは、人々のアイデンティティ, 自律性, 社会的コンピテンスによって構成されているということの意味する」(Germain, 1978 : 519) とジャーメインは言及する。彼女は、アルトマン (Altman, 1975) を引用し、「プライバシー」, 「対

人距離」,「縄張り習性」,「群集性」についても空間との関連で検討している(Germain, 1978: 520).

ジャーメインは、私たち自身の努力の重要性について、次のように述べている。「人間は行動のコースを選別し選択するために生物学のおよび環境の限界からの自由度をもっている。したがって、人間は創造的でもありうるし、破壊的でもありうる」、そして私たちは、「科学技術的汚染と社会不正の汚染を減らすために、計画、選択、行動に取り組むことができる」、「人々の関心が高まり、知識が深まるにつれて、物理的および社会的環境への介入の結果が予想され、その破壊的効果が回避または最小化される」、「それは確かに空想的でもあるが、新しい社会のデザインや生活スタイルを開発し、農村や都市の土地利用の改善に努力することが希望をもたらす。また、科学者の間で社会的価値への関与が広がることや、すべての国の人々が、生活と環境への制御の向上、および意見の多様性の向上を求めること、それが明るい見通しをもたらす」(Germain, 1979: 10)。私たちが日々の努力を怠れば、科学技術的汚染と社会的不正の汚染は広がり、環境は破壊されていくのである。

1980年に、ジャーメインは、ギッターマンと『ソーシャルワーク実践のライフ・モデル』という著書を刊行する。その中では、「機構のプロセスが問題化する場合、ソーシャルワーカーは、応答性のない実践・手順・プログラムの変更を求めて機構に批判的に働く」、「より多くのデータが必要だろうが、問題を再定義することが求められる。また、環境を変化させる努力の実行可能性を高めるために、実行手段を変更することが求められる」(Germain, 1980: 337)、「ワーカーは次に、環境を変化させる努力を受け入れる機構の風土(organizational climate)を開発する」、「ワーカーは、専門職業的コンピテンスと対人ネットワークへの関与によって、インフォーマルな信頼が高められ、尊敬されることであろう」(Germain, 1980: 338)、との記述がなされている。

相互作用とは異なる「交互作用(transaction)」の説明として、ジャーメインは、「すなわち、人と環境は不断に循環し交換しており、それぞれ互いが、時間の経過とともに、互恵的に形作られ影響を与え合う」(Germain, 1985: 34)とし、キーワードとして「互恵」、「循環」、「交換」を挙げている。また、滋養豊かな環境(environmental nutriments)について次のように言及している。「人々の潜在的可能性を解放し持続させる環境の滋養性は、実際には多様性である。このような滋養性には、文化のさまざまな次元と合致し、適切な時期に適切な質と量の生物学的、認知的、知覚的、感情的、情緒的、社会的刺激が与えられなければならない。社会的滋養性とは、豊かな環境をいかに活用できるか、環境の質をいかに高められるかに影響を及ぼす〈機会保障〉,〈社会的権利尊重〉,〈権限の分配〉で構成される環境的資産だといえる」(Germain, 1985: 39)。

ジャーメインは、時間性に関しては次のように補足している。「時間はハビタットの重要な次元である。成長し発展するには時間がかかり、学ぶにも時間が要る。人は孤独の時間を持たねばならない。そして相互に関わる時間、ストレスを処理する方法を身に付ける時間を持たねばならない」(Germain, 1985: 41)。そして具体的に、「ソーシャルワーカーは、ハビタットを分かち合われた状態に保持し、損なわれたネットワークを再構築するため、また育児・生活情報等の社会資源を活かす相互援助システムの開発のため、漸進的社会づくりを目的として、例えば住宅改良事業によって、家族に援助を提供する」(Germain, 1985: 41-42)と彼女はワーカーの目的を指摘している。

また、1981年の論文で彼女は、「社会的環境」や「物理的環境」という用語を、アレン・ピンカス(Pincus, 1973)とアン・ミナハン(Minahan, 1973)から援用したものだとしている。そして彼らの「人間の行動や態度は、社会的・物理的環境の特質によって直接的な影響を受けるという考え方」(Germain, 1981: 324)を評価している。

3.2. ハビタットとニッチに働きかける

ジャーメインは、生態学からハビタット (habitat) とニッチ (niche) という概念を借用する。ハビタットは、生態学では、生息領域という意味であり、「生物が住処や本拠地や縄張りを見出す場所」を指す。人間の場合、ハビタットは、「文化的脈絡での物理的、社会的な生活環境」である。その二つの環境に関しては、「住居、建物、農村、都市構造などの〈物理的な生活環境〉は、ライフスタイルや年齢、ジェンダー、文化に合った、家庭生活、社会生活、職業生活、信仰生活などの〈社会的な生活環境〉を支える」という関係にある。そして「健康、および個人や家族の社会的機能を支えないハビタットは、孤立、混乱、絶望の感情を生み出し助長するだろう。そのようなストレスに満ちた感情は、家族と地域生活の基本的機能をさらに妨害するだろう」(Germain, 1985: 41) とハビタットの意義について彼女は述べている。

物理的環境は、二つの層から成り立っている。一つは動植物や景色、気候、無生物などから構成される「自然界」であり、もう一つは、交通・通信システムを含めた「人工構造界」である。物理的環境は、それぞれに「時間」と「空間」による織物 (texture) で構成されている。

ソーシャルワーカーは、クライアントが持つさまざまな時間を統合的にアセスメントする必要がある。かつ、交互作用的な時間は、過去から現在に因果的・直線的に伸びているものではなく、複雑な環境要素と絡み合い、共鳴・反響・残響作用を持つものである。私たちは、商品の生産管理過程で用いられる PDCA サイクルを対人援助や相談支援過程に応用することがあるが、それはあくまで限定的に用いられるべきものであり、改めて、「人生は目標設定とその達成過程ではない」こと、「時間には意味がある」ことを認識しなおす必要がある。

「空間」についてジャーメインは、暖炉や炉端など、「くつろぐ談笑の場所」、洞窟のような「秘密の場所」、縄張り・本拠地、カーテンやドアで「プライバシーを守る場所」、お風呂のような「レ

クリエーションの場所」、樹々を眺め日没を楽しむ「自然と親しむ住処」、などを挙げている (Germain, 1978: 517-518)。このような多様な空間が保障されていることが、豊かなハビタットである。筆者ら団塊の世代が子どものころ遊んだ「空き地」、「お寺の境内」、「河川敷」、「探検の森」などアナーキーな空間も、露地やカフェやパブのような《プライベートとパブリックが相互に半開きで乗り入れする場所》も、時代に合わせて再生すべきものであろう。

ジャーメインは、クレーン・クーパー (Cooper, 1976) の、「公営の低所得者用高層アパートは、入居者の、価値と尊厳のある個別的でユニークな人間としてのセルフイメージを損ねる」(Germain, 1978: 519) との見解を引用して、空間と人間の関係について述べている。それは、地域の交互作用を阻害し、インフォーマルな社会的ネットワークを壊す一面があるからに他ならない。長期に福祉施設に入っている人や精神科病院に入院している人にも同様のことが言える。このような人たちには、プライバシーの確保と併せて、自分でデザインできる空間と時間を、自宅で暮らす人と同様に増やすこと、および多様な人、多様な空間と時間に接する機会を、自宅で暮らす人に近づけていくことが求められる。

ニッチは、フランス語の *nicher* からきた言葉で、「巣をつくる, to nest」が原意である。ジャーメインは、「生態学においてニッチは、生物の種類によって占められた生活共同体における位置、つまり生命の織物でのそれぞれの自分の場所を指す」とし、「人間の場合は、ニッチは、暗喩的に、特殊な集団や個人によって、また権力や迫害の問題と関連して、社会構造に占める地位を指す」としている。そして彼女は、Delone (1979) を引用して、人間の成長を支え、健康を促進するようなニッチが、「私たち自身の社会においては、平等な社会的機会を保障する権利を含む、一連の権利によって形成されるとする一般的な説がある」(Germain, 1985: 45) としている。

ジャーメインが《権力性》や《社会構造》、《権利性》に言及していることには注目せねばならない。なお、ジャーメインは次のようにも指摘している。「私たちの社会では、何百万の子どもや大人が、人としてのニーズと目標を支援しないニッチに留まるよう強制されている。ときにそれは、性別、年齢、肌の色、民族性、社会階級、生活スタイル、あるいは社会的に価値無しとされる個人的・文化的特性を理由になされている」。つまり、ジャーメインは、辺境的で破壊的なニッチにある人たちとして、「保険適応外の患者、厳しい条件下にある里子、児童扶養手当をもらっている母親、長期間失業者、不登校児童、公営住宅の借家人、少数グループの生活困窮者、移民労働者、年老いた女性、同性愛者、など」(Germain, 1985: 45)を挙げている。この人たちに交互作用的で創造的なニッチを提供できるようにすることが、ソーシャルワーカーの役割である。

以上の思想を要約すると、次のようになる。ソーシャルワーカーは、《病氣・障害・失敗・深い悲しみに直面しても、人間はなお成長や健康に向かって活動する、持って生まれたパワーをみな持っており》、そのパワーの開花が、環境との交互作用の活性化、つまり社会資源、社会機関、政治的・経済的機構、政策、および、時間的、空間的生活環境に関する「変化と革新の過程」への行動的参画によってもたらされる、との信念に依拠して活動する。ソーシャルワーカーは、この過程をクライアントと共展開(co-evolution)的に行う。

ライフ・モデルでは、クライアントが置かれている環境の「時間」と「空間」、「社会的・科学技術的汚染」、およびクライアントの「関心の全体像(unit of attention)」をアセスメントする。

3.3. 平塚良子、小島蓉子の研究、および グリーンソーシャルワーク

ジャーメインらのエコロジカル・パースペクティブを、日本で早い時期に総合的に研究した一人に、平塚良子がいる。平塚は、「人生の出来事

からくる問題やニーズ」と「環境からくる問題やニーズ」、および「不適応の人間関係過程」の三者に、クライアントとワーカーが一緒になって、交互作用的機能を高めるよう促進していき、三者相互の交互作用的機能も高めることの意義を、ジャーメインらの理論を紹介しつつ提唱している(平塚, 1983: 9)。交互作用的機能は、力動的、創造的であり、互恵的なものである。したがって、快適であっても管理された時間と空間は、ライフ・モデルの克服すべき環境である。平塚は、北欧の高齢者施設の実情を取り上げ、bland(安穏な、気の抜けた)環境は主体的な交互作用を損なうこと、および一定のストレスは「時によっては必要な場合がある」(平塚, 1983: 12, 9)とのジャーメインの説を紹介している。

平塚は、1984年の論文で、ハリエット・パートレットからミナハンらの「システム・パースペクティブ」を経て、ジャーメインらのライフ・モデルへと行きついた思想の流れを分かりやすく説明している。パートレットは、人と環境、人と状況との間に着目した。また平塚は、彼女の「危機が人びとに成長を促す機会となる」との言葉も紹介している。葛藤止揚過程としての交互作用が肝要なのである。そして、ライフ・モデルでは、「人と環境とが一つの系をなす統合システム」なので、生活問題を個人の病理的問題として捉えるのではなく、「生態系(エコシステム)の諸要素間の相互作用の結果」(平塚, 1984: 11)として捉えるべきことを平塚は確認している。

ライフ・モデルによるアプローチの現状に関する平塚の評価は厳しいものである。今日の社会を覆う「人種や民族差別、性差別、階級差別、障害者差別」や「貧困」など「環境の構造的汚染」(平塚, 1989: 32)を、ライフ・モデルの実践は明確に認識せず、クライアントの鋳型的適応促進に終始していると批判している。

小島蓉子は、ジャーメインのエコロジカル・ソーシャルワークを総合的に日本に紹介した第一人者である。小島は、「環境」が「人間」のニー

ズに答える力を「応答性」とするジャーメインの説を挙げ、環境の「『応答性』(responsiveness)の強化に刺激を与えることがワーカーの課題である」(小島, 1992: 232)と強調している。なお、ジャーメインと直接親交のあった小島は、1992年の著書『エコロジカル・ソーシャルワーク』の刊行後1年足らずで急逝している。

上野谷加代子と所めぐみ等によって、2017年、レナ・ドミネリ(Dominelli)によるグリーンソーシャルワークが紹介された。ドミネリは、マイノリティの住む地域に環境汚染の影響が大きいことから、「環境正義」という理念を掲げている。環境正義は、「すべての人が、環境及び健康に関する脆弱性から同じように守られ、生活し、学び、そして働くことができる、健康的な環境を手に入れるための意思決定プロセスへの平等な関与」(Dominelli, 2017: 125)がなされることを目的としている。これは、エコロジカル・ソーシャルワークの展開だと考えられるが、ドミネリは、エコロジカル・ソーシャルワークはその「域内にとどまっている」とし、次のように述べて両者の違いを主張している。エコロジカル・ソーシャルワークは、「貧しい人々を市場の外における低所得状態に追いやっている構造的な不平等や資源の不平等な分配を問題視していない」(Dominelli, 2017: 32)と述べる。そしてドミネリは、「構造的な不平等をおち壊すための資源、意思決定にかかる権力と権威の大幅な委譲」、「経済システムが人びとのために奉仕するためのシステムの再構築」(Dominelli, 2017: 46)を求めていく。筆者は、エコロジカル・アプローチが、構造的な不平等や意思決定権力の問題を提唱しているが、実践的展開としては不十分であったと考える。

4. エコロジカルなアプローチとは何か

4.1. システムへの働きかけの実践

アン・ミナハン(Anne Minahan, 1925-2005)とアレン・ピンカス(Allen Pincus)によって、

1973年、ソーシャルワークのシステム・アプローチが提起される。二人は、ハリエット・バートレット(Harriett Bartlett, 1897-1987)のソーシャルワーク理論を踏まえ、フォン・ベルタランフィの「一般システム理論」から発想を得て、個人でも集団でもなく社会システムに働きかけていく理論を展開した。これはやがて、エコロジカルなアプローチへとつながっていく。

心理療法の世界でも、「システムズ・アプローチに基づく家族療法」が提起されていく。この理論の日本における代表的臨床家である東豊は、家族システムを、「安定的・自動的に繰り返される家族のコミュニケーションの連鎖、あるいはパターンやルール」(東, 2010: 3)と捉えている。また、家族システムは、医療システム、学校システム、職場システム、親戚システム、近所システム等々と相互影響しているので、「開放システム」であるとしている。システムズ・アプローチは、このコミュニケーション・パターンを変え、再構造化していく(東, 2010: 10-11)ことで、暴力的・攻撃的スパイラルを、ケアし合うスパイラルに変えていく方法である。もちろんその主体は家族である。

まず東は、家族が、犯人探し、責任のなすり付け合い、自責という負のスパイラルに陥らないために、不登校や過食などの生起要因を、生育歴、家族関係、親や本人の性格に求めないように話し合う。不登校や過食の原因は、「虫」が憑いたり、「うずしお」に巻き込まれたせいであるというストーリーを語り、問題要因を《外在化》する。そして、「鳴門のうずしお」に巻き込まれた本人も家族も被害者(東, 2010: 154)とし、家族全員協力して「虫退治」(東, 2010: 118-141)を行うよう促す。ネーサン・アッカーマンが、Family as a wholeと提唱した理念の実践といえる。こうして、《外在化》した犯人の《共有化》がなされる。

このプロセスは、べてるの家の「当事者研究」で、自らの特異な体験に独自の名前を付けて症状を《外在化》《物語化》し、みんなの前で発表することで、《共有化》するプロセスと重なる。

次に東は、病気虫、不安虫、自責虫などの「虫退治」のために、家族に対し、本人のために何でもする覚悟があるか、と迫る。次回の面談までに迷いながら《肚を決める》のは、家族だけではなく、本人も同様である。こうして、《困りごとは専門家に直してもらおう》歯医者のようなイメージに期待し続けるのではなく、自分たちで life challenges を address していく構えが生まれるのである。家族が本気で協力することで、《主体性》が発揮され、結果として自然にコミュニケーション・パターンがケアし合うものへと変化していくといえる。

東は、肚を決めた家族に、本人が学校へ行けなかった日は、親も一日外出禁止、ときには夕食抜き「罰ゲーム」を約束させる（東、2010：43）。もちろん、いきなりの登校を求めるのではなく、校門まで行って帰ってくるなど、スモール・ステップの目標も家族で立ててもらおうと促す。罰ゲームは、本人へのプレッシャーにもなるが、家族の本気度や協力度を引き出し実現する分かりやすい行動療法ともいえる。

親子でも夫婦でも、共に苦しむことがないと、絆は深まらないし、豊かにならない。苦しみを分かち合うことによって、コミュニケーションが深められ、心が通じ合う。どんな家族も持っていたこの働きが、今日、利便快適志向の家族関係への浸透によって失われ、専門家によって再生を促進してもらわねばならなくなっている。家族が失った最大のものが、この共受苦の営みではなからうか。

4.2. 「弱い関係」の重要性

精神科医の中井久夫は、ギリシャ語のシュネイデーシス (syneidesis) がラテン語のコンスキエンティア (conscientia) となり、conscience (良心) の語源となっているとしているが、これは、「共に (痛みを) 知る」(中井、1999：222) という意味だと指摘している。

オープンダイアログの目的も、「患者の苦しみの意味がよりはっきりするような共有言語をつ

くり出すこと」(斎藤、2015：38) とされている。本人を交えて、家族や関係者がさまざまな声で (ポリフォニーに)、対話することを通して、コミュニケーションが深まり、「共に苦しみを知る」ことができるまでに至るとき、患者の心は自然治癒力を発揮するといえる。

ただし、強い絆があるだけではいけない。「強い人間関係は閉鎖的で外部との受け渡しの機会に乏しく、それを補う弱い人間関係が重要だ」(中井、2006：135)、「社会にひげ根を張るには弱い関係の豊かさが欠かせない」(中井、2006：136) と中井は述べる。弱い人間関係は、「遊び」やレジリアンスの役割を果たしてくれるのである。

中井によれば、「荒れている少年」は、「自分と通じ合えなくなっている」(中井、1997：82) とされる。些細な規則違反を咎める教師も同様である。自分とは、自分の内面のコスモロジーであり、これまで関わった人々、野原のトンボやスズナなどの動植物、夜の星空、幼少時からの自分自身などで構成されている (中井、2016：115)。少年も教師も、自分の内面のコスモロジーとやさしく対話できないから、権力欲にとり憑かれ、攻撃性を自他に及ぼす。

自己との対話は、他者との対話が豊かになされることで実現される。たとえば、「自分のセクシュアリティと『通じ合う』」ためには、「他者のセクシュアリティを認め、それとのやさしいコミュニケーションができる」(中井、1997：82-83) ことが求められる。

生物多様性に関連して、中井は、キノコやカビの匂いは、安らかな鎮静効果があり、馴染みをつくり、住み心地、居心地、寝心地をもたらすとしている (中井、1995：252-257)。また、長屋や露地がもっている「都市の腐葉土的な部分」(中井、2006：25) の心に及ぼす大切さを指摘している。近代的なコンクリートの建物には、これが欠落している。木漏れ日、緑陰、木の香りも私たちのメンタルヘルスに貢献してくれるが、なによりも「植物の生の英知」(中井、2006：3) が教えてくれる

ものは、《人間に役に立つために植物があるのではなく、植物を含めた生物多様性の世界に、人間が育てられ生かされている》という当たり前の事実である。

5. ライフ・モデルに関連する思想

5.1. 生命科学と渡辺格の思想

中井久夫の京都大学ウイルス研究所時代の師は渡辺格（1916-2007）である。日本分子生物学会初代会長、日本学術会議副会長を歴任し、日本を代表する生命科学者の渡辺は、人生観、障害者観、高齢者観の重要性に関連して、次のように述べている。

「充実されるべき人生とは何かという問題があって、現在すでにそこをある程度はっきりさせないと経済学自体も基盤を失うような状況が起きていると思うのです。その問題の解決には、一概に老人や障害者などの弱者への経済的手当てを厚くすればいいというものじゃだめなんです。そういう人たちをどう見るかという問題は、実はその人たちだけの問題ではなくて、われわれ自身の問題でもあるわけです。」（渡辺、2017：204、初出は1977）。渡辺は、私たち自身が疎外されている事実を指摘している。渡辺にとって、「充実されるべき人生」とは、「生命世界を豊かに」していくことに貢献する人生である。生命世界の豊かさとは、「地球全体を緑で覆いつくし」、「生物世界の多様性を保ち、多種多様な動植物（われわれ人間を含めて）の世界を実現していくこと」（渡辺、1986：180）である。この多様性の実現は、「人間どうしが、強者も弱者も価値ある共存できる世界をつくり上げること」（渡辺、1986：181）を含んでいる。そのための人間観は、生命の種に高等・下等の決めつけができないという事実から生まれる。たとえば大腸菌の物質代謝系を調べると、人間以上に巧妙で精緻な戦略を取って生きている。「バクテリアはヒトと同様に進化の極致にある」（渡辺、1986：183）と渡辺は指摘する。

また渡辺は、京大時代の教え子である利根川進の研究成果を引き、出生して成熟していく過程でDNAのつなぎ替えが起こる事実を取り上げ、DNAの再配置や開花は、環境との交互作用因子が重要であることを強調している（渡辺、1986：31）。生命科学的には、優生も劣生もないのであり、DNAが活かされるか否かは、環境と環境への関わり次第だということになる。

DNAは、1953年にワトソンとクリックによって二重らせん構造として発見され、生命科学に新たなステージを拓いた。渡辺は、DNAを発見したワトソンの自宅に何度か訪問している。渡辺によると、DNAの遺伝暗号は、「ウイルスやバクテリアから人間にいたるまで、地球上すべての生物に共通している」という事実がある。だから、「人間も動植物も微生物も兄弟姉妹だ」（渡辺、1993：94）と渡辺は主張するのである。しかも、長い歴史の中で、植物のDNAが動物に入った、その逆が起きたりしているという。かつ、ヒト・ゲノムの場合、「遺伝子と思われるDNAは10パーセント以下とほんの一部にすぎず、90パーセント以上はその役目をもっていない」（渡辺、1993：101）とのことである。DNAは分かっていることが多い。しかし、生命を支えている重要な意味があるはずである。病や老いや死にも意味がある。

そして渡辺は、「経済成長のために、余計なものをつくるほうにばかり努力が払われているんじゃないかな？ GNPが上がったというのは、生物的な需要と関係ないようなものの上昇をはかっていっているだけのことでしょ。」（宇沢・渡辺、2017：208）と述べて、人々の競争心に訴えない、生物的需要に対する生産を第一義的に考えた、「いままでのような形の経済成長を止めた」社会の実現を模索している。

ドナルド・ハーディスティ（Donald L. Hardesty）によると、人間の文化は、食糧確保戦略（feeding strategies）をめぐる、捕食時間を最小限にしようとするもの（time minimizers）と、捕食に

よって獲得するエネルギーを最大限にしようとするもの (energy maximizers) という二つの傾向があるとする (Hardesty, 1977: 61, 62). たとえば、南部アフリカのブッシュマンは、1日4時間働いて、あとは、おしゃべりや歌やダンス、他のキャンプ訪問などで過ごす。つまり、タイム・ミニマイザーの文化なのである。これに対して私たちの文化は、あくせく働いて娯楽品を消費させられているエナジー・マキシマイザーの暮らしといえよう。渡辺が指摘するように、経済成長という自働システムの手段に人間が成り下がっているのではなからうか。

5.2. 仏教経済学とシューマッハの思想

ケインズに師事し、ウィリアム・ベヴァリッジの求めに応じて『自由社会における完全雇用』(1944)を執筆したエルンスト・シューマッハ (E. F. Schumacher, 1911-1977) は、1973年、自らはカトリックを信仰しながら、「仏教経済学」を提唱した。シューマッハは、「積尊の教えは、いっさいの生物に対してだけでなく、とりわけ樹木に対して敬虔で優しい態度で接することを求める」(Schumacher, 1986: 77) 点を強調し、「非暴力」志向を仏教経済学の要点としている。また、「仏教は『中道』であるから、けっして物的な福祉を敵視しはしない」(Schumacher, 1986: 72) のであり、「富への執着」を避けるために簡素な生活を求めることを仏教経済学の要点として挙げている。現代経済学の求めるものは、「消費量」を上げ「コスト」を下げることであり、とされている。彼は、石炭や石油のような「再生不能財は、やむをえない場合に限って使うべきもの」であって、これをぜいたくに使うことは、「一種の暴力行為」と指摘している。とりわけ、原子炉から出る放射性廃棄物の問題をシューマッハは厳しく批判している。そして、原子炉自体が最大の暴力的廃棄物で、壊すことも動かすこともできず、何千年の間、放置しておかねばならず、その間、空気と水と土壌を汚染し、あらゆる生物に脅威を与え続け

る (Schumacher, 1986: 180), と警告している。

シューマッハは、農業の重要性を、食糧や原料を創り出すことのほかに、次の目的を持つ点を強調して指摘している。①「人間は自然界のごく脆い一部である」ことを教えてくれること、②「人間を取り巻く生存環境に人間味を与え、これを気高いものにする」(Schumacher, 1986: 147) ことである。

さらにシューマッハは、簡素な生活、簡素なシステムを求めて、次のように私たちのシステムを批判している。「著しくモノに向けられた効率という概念は、規模の経済という神話へと導くことになります。専門化すればするほど、分業化すればするほど、画一化になればなるほど、そして心遣いが欠ければ欠けるほど、生産が大規模になり、より一層複雑になり、より資本集約的になり、特殊な意味においてより一層暴力的になります」(Schumacher, 1980: 216)。

5.3. ベルタランフィの思想

ソーシャルワークのエコロジカル・パースペクティブは、一般システム理論から大きな影響を受けた、ルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィ (Ludwig von Bertalanffy, 1901-1972) によって、1968年、「一般システム理論 (general system theory)」が提唱された。以下にそれを概説する。物理学でいうエントロピーは自然状態では常に増加し、つまり、たえず秩序は崩れていく。しかし、生物システムは、環境との間で物質を交換し合う「開放システム」であるがゆえに、「エントロピー増加を避けることができるし、高度の秩序とオーガニゼーションの状態へ向かって進むことさえできる」(Bertalanffy, 1973: 38)。かつ彼は、環境とは、inter-actionalではなく、trans-actionalな関係へと向かう傾向を持ち「開放システム・モデル」だとする。また、環境は物理的なものと文化環境があり、人間のグループは、「文化と呼ばれる人間の創造した世界の一部でもある」とする。

そして彼は、「文化の世界は本質的にシンボル

の世界である」(Bertalanffy, 1973 : 192) と指摘する。シンボルとは、「言語から始まって、友人、社会的地位、法律、科学、芸術、道徳、宗教その他」である。人間は、この文化環境を創り出し、文化環境に大きな影響を受ける。たとえば現代では、物理的ストレスよりも、「生きていることの無意味さ」(Bertalanffy, 1973 : 202) からさまざまな精神的不調や犯罪が生じるのである。だからこそ、ベルタランフィは、人間を、社会文化的な環境システムに相互変容的に関わる「能動的な人格システム」(Bertalanffy, 1973 : 203) として捉えるべきことを主唱しているのである。

彼は、環境とのトランザクティブな関わりで、生きている意味を創り出す人間のアプローチの問題を、次のように示唆している。「電子とはなんで《ある》のかという質問に、物理学者は答えない。自然現象を一番深く洞察してみても答えうるのは、ただ《電子》と名づける実在を支配している法則がどんなものかということにすぎない」(Bertalanffy, 1974 : 218)。これは、生物学者に、生命とは何か尋ねても、同じように生命現象に関する法則が返ってくるばかりだ、ということである。生命とは何かの答えは、神話や詩や哲学が語ってくれる。ベルタランフィは、生命とは、夕陽、清流、霧、虹、うつろう時間などに抱かれた、はかない命としての自分であり、かつ永遠なるものの一部である自分である、と述べている。

5.4. 「滋養豊かな環境」とは

私たちはこの環境との関係を、数百年のうちに大きく失ってきた。中井久夫は、ニッチを「ある種なり団体が環境と動的な平衡を保ちつつ生存のための諸条件を安定して維持できる領域」と定義したうえで、「かつて自然の一部であった人間は、自前で『土壌』を作る必要がなかった。今や自然からはみでた人間は、自前で『土壌』を作ろうとして苦心している」と分析している。中井にとって、「ニッチ」は、「森の腐葉土のような、多様な生物の生息する土壌」なのである。ジャーメイン

の言う「滋養豊かな環境」を土壌としてニッチが造られる。

そして現代では、個人によって、「ニッチ」を発見できる場合とそうでない場合の格差がみられるとしている。また中井は、「ぜひ言っておきたいのは、多様な『老い方』を許容するような社会を成熟した社会といい、一様な老いしか許容しない社会は老人を『群衆』化し、老人には場がない社会は、老人を行き場のない悲劇的な『ポートピープル』のような存在にするとということである」(1991 : 162) と、《多様な生き方》を認め活かす社会を求めている。

5.5. 病気や死などシンボリック環境との交互作用

同様に、文化人類学者の山口昌男は、私たちの文化の一つの特徴を次のように語っている。「われわれに伝えられて来た科学技術によれば、人間は廻りの自然から切り取られ囲い込まれた独自の体系を持つ最強の自働体であり、廻りの自然を従属させ、自らのモデルに従って思いのままにこれを変形させ、それでも敵対するものは、これを絶滅させることが人間を中心とした宇宙的秩序の確立のための不可欠の行動なのである」(山口, 1990 : 11)。

開放システムであるべき人間が、自ら閉鎖システム化を進めていく傾向が続いているのである。

ベルタランフィが指摘したシンボリック環境とのトランザクティブな関わりについて、山口は、病気とその延長にある死の意味を取り上げ、「成熟への通過点としての文化の重要な位置を占めていた」とし、次のように語っている。「病気というものはそれによって体内のみならず、外部の何らかの兆候(シンプトン)を読み込むメッセージだったので。その媒体を追放するのではなく、それを『飼う』ことで、自分の身体と対話し、世界と対話するという能力を備えることに意味があった」(山口, 1990 : 112)。

そして山口は、治療とは、「全体的で精神的に広大な枠組みを与えること」であるとし、それに

よって「病気をメッセージとして受けとめ」るようになるから、結果として「他の人間と共に生きられる」ようになることだとしている。したがって、治療者とは、「大病にかかり、神からメッセージを受けた人間」、病気を「自分の魂の拡がりの一部として捉え」られる人間（山口，1990：113-114）ということになる。この言説を踏まえれば、AAやDARCなどセルフヘルプ・グループの活動の意義が改めて納得できる。

具体的にこのような治療に関して山口は、ナイジェリアのロングダ族の事例を引き、「その医者は大抵は女性ですが、病人を前にして祈り、そして何かイメージを見るそうです。それをネンドで形造って患者に与えます」、「そのネンドの像を患者は家に持って帰り窯で焼き、ニワトリの血をかけて祈るのです。そうするとその像が患者の中にある病気を吸収してしまうと考えられています」（山口，1990：80）と紹介している。ここで、祈ることと粘土にすることが重要になっている。《祈る》とは、大野晋によれば、「い」が神聖なものやタブーを意味し、「のる」は「大声で告げる」ことを意味している（大野，2011：140）。つまり、《祈る》とは、宇宙的なもの、シンボルとしての世界とのトランザクティブな対話であるといえよう。医師が祈り、患者が祈るのである。祈ることによって、河合隼雄の言葉である「カウンセラーが真剣に悩まなくて、患者が良くなることは絶対にない」に通じる共時性（synchronicity）が生じるのであろう。

また「ネンド像」の意味するところは、病気の外在化と共有化である。この点も、現代の私たちは同様のことを行っているのではなかろうか。

山口は、死について、死者の死によって終わるものではなく、「共同体の中で抱え込まれ活かされ」るものであり、「生に意味を与えるもの」（山口，1990：114）としている。そして山口は、「死は成長するものなのです。だからこそ、死を育てるという逆の発想が伝統の中にあった」（山口，1990：113）と指摘している。《死と付き合い、育

て、培養する》という発想を私たちは取り戻していきたい。

6. ソーシャルワーカーに求められているもの

地域に関わるソーシャルワーカーの思想射程は、「まちづくり」で自己完結するものであってはならない。今日、ワーカーに求められているものは、以上述べたエコロジカルな視野と構想力である。交互作用的関与とは多声的対話の謂いである。自然生態系の環境は多声的対話に満ちている。これに独裁的支配・搾取・操作・管理を及ぼし破壊・汚染しているのは人間である。大量消費生活様式や原発を次世代に残してよいものだろうか。「学校・会社システム」の中に多声的対話によるつながりを創出していかなければならない。環境や人々と多声的対話をする能力こそがコンピテンスであろう。家庭・地域において、共に苦悩するコンピテンスを開発する仕掛けが必要である。そして真に暴力性の克服をもたらしてくれるものは、内面の宇宙性と生態系との同期的な多声的対話である。死や悲苦に共感し対話する時間を共に過ごすことで、フロムの言う中心体験が共展開（co-evolution of central experience）され、地域が育つ。この共感性の裏付けのない主体性は自発性にすぎない。

ワーカーには、①生態系や宇宙の世界に包まれ、自己の消滅と悠久を感じ、②多様な立場の人と、多声的で相互リフレクティブな対話をし、③家族との《育て合い》、手を使った《創作》をし、④美的で象徴的世界を楽しみ、⑤地球環境を守る政策提言と行動に参画し、⑥以上の視点から、クライアントの生活の質とニーズをアセスメントすることが求められる

いのちを大切にする風土だけが個人の尊厳を育む。そこからしか真の主権性は培われないであろう。

参考文献

- 東豊 (2010) 『家族療法の秘訣』日本評論社.
- Bertalanffy, L. v. (1949) *Das biologische Weltbild. I-Die Stellung des Lebens in Natur und Wissenschaft.* (長野敬・飯島衛訳 (1974) 『生命: 有機体論の考察』みすず書房).
- Bertalanffy, L. v. (1968) *General System Theory: Foundations, Development Applications.* (長野敬・太田邦昌訳 (1973) 『一般システム理論: その基礎・発展・応用』みすず書房).
- Dominelli, L. (2012) *Green Social Work* (1st Edition). (上野谷加代子・所めぐみ監訳(2017) 『グリーンソーシャルワークとは何か—環境正義と共生社会実現』ミネルヴァ書房).
- Germain, Carel B. (1973) An ecological perspective in casework practice. *Social Casework*, 54(6).
- Germain, Carel B. (1976) Time: An ecological variable in social work practice. *Social Casework*, 54(6).
- Germain, Carel B. (1978) Space: An ecological variable in social work practice. *Social Casework*, 59(9).
- Germain, Carel B. (1981) The ecological approach to people-environment transactions. *Social Casework*, 62(6).
- Germain, Carel B. (1979) Introduction: Ecology and social work. Germain Ed. *Social Work Practice: People and Environments*. Columbia University Press.
- Germain, Carel B. (1985) The place of community work within an ecological approach to social work practice. Samuel H. Taylor and Robert W. Roberts Eds. *Theory and Practice of Community Social Work*. Columbia University Press.
- Germain, Carel B. and Hartman, Anne (1980) People and ideas in the history of social work practice. *Social Casework*, 61(6).
- Germain, Carel B. and Gitterman, Alex (1980) *The Life Model of Social Work Practice*. Columbia University Press.
- Germain, Carel B. and Gitterman, Alex (1987) Ecological perspective. *Encyclopedia of Social Work*, Vol. 1 18th Edition, National Association of Social Workers.
- Hardesty, Donald L. (1977) *Ecological Anthropology*. University of Nevada, Reno.
- 平塚良子 (1983) 「社会福祉実践における Ecological Perspectives について」『キリスト教保育専門学院年報』vol. 3.
- 平塚良子 (1984) 「Life Model における人間観について」『キリスト教保育専門学院年報』vol. 4.
- 平塚良子 (1989) 「ライフモデルアプローチのパラダイム論考」『キリスト教保育専門学院年報』vol. 9.
- 加藤博史 (2016) 「人権志向の自治力の向上指標」井岡勉・賀戸一郎監修『地域福祉のオルタナティブ』法律文化社.
- 小島蓉子 (1992) 「実践における生態学とは？」カレル・ジャーメイン他著, 小島蓉子編訳著『エコロジカル・ソーシャルワーク』学苑社.
- 森田ゆり編 (2018) 『虐待・親にもケアを』築地書館.
- 中井久夫 (1991) 『中井久夫著作集 精神医学の経験 6巻 個人とその家族』岩崎学術出版社.
- 中井久夫 (1995) 『家族の深淵』みすず書房.
- 中井久夫 (1997) 『アリアドネからの糸』みすず書房.
- 中井久夫 (1999) 『西欧精神医学背景史』みすず書房.
- 中井久夫 (2006) 『樹をみつめて』みすず書房.
- 中井久夫 (2016) 「こころ」杉村昌昭・境毅・村澤真保呂編『既成概念をぶち壊せ!』晃洋書房.
- 大野晋編 (2011) 『古典基礎語辞典』角川学芸出版.
- 斎藤環 (2015) 『オープンダイアログとは何か』医学書院.
- Schumacher, E. F. (1977) *A Guide for the Perplexed*. (小島慶三・斎藤志郎訳 (1980) 『混迷の時代を超えて』祐学社).
- Schumacher, E. F. (1973) *Small Is Beautiful: A Study of Economics as if People Mattered*. (小島慶三・酒井懋訳(1986) 『スモール・イズ・ビューティフル』講談社).
- Seikkula, J. and Arnkil, T. E. (2006) *Dialogical Meetings in Social Networks*. (高木俊介・岡田愛訳 (2016) 『オープンダイアログ』日本評論社).
- Sophia Smith Collection. Carel B. Germain Papers Biographical Note. Smith College Libraries.
- 宇沢弘文・渡辺格 (2017, 初出 1977) 『生命・人間・経済学—科学者の疑義』日本経済新聞出版社.
- 渡辺格 (1986) 『生命科学の世界』日本放送出版協会.
- 渡辺格 (1993) 『なぜ、死ぬか』同文書院.
- 山口昌男 (1990) 『病いの宇宙誌』人間と歴史社.

註記 ジャーメイン等の原著の中の引用典拠は原著を参照されたい.

An ecological perspective based on welfare philosophy to improve the quality of community: Toward a community structure that cares for the “Life-World”.

Hiroshi Kato

Professor Emeritus, Ryukoku University

This paper aims to clarify the term, “quality of community.” In particular, the author envisions the concept of an “ecological community” and the “empowerment of its inhabitants.” The author makes the following observations: first, the “schooling society” and the social network system on personal digital devices are transforming the current circumstances of communities, and human beings must use their autonomy to recognize this notion of community without adapting to it; second, the author reviews Carel Germain’s life model approach of social work to show that reciprocal transactions in a community environment are crucial in resolving issues related to social and technological “pollution” and oppression; and third, individual dignity and autonomy can be actualized by caring for the Life-World and through the co-evolution of the “empowerment of its inhabitants”.

Key words: quality of community, ecological perspective, life model, Germain, social work